

# 昔の道を歩く

— フランス式彩色地図を辿る —



網野染夫  
池田豊  
上原清文  
大木美行  
小川由美子  
加島一彦  
小柳政春  
高橋孝子  
星野松雄  
山崎悦子  
山崎義明  
山中恭子

第 18 期 歴史郷土学部 研究課題 A 班

## 1. はじめに

260年以上続いた江戸幕府、その太平の世の中で庶民の文化も花開き、そのために様々な人の移動が行われていた。その移動を担っていたのは陸・川・海の「道」である。当時の人々は、どこに位置していた道を歩いていたのだろうか。

東松山市の江戸時代後期の古地図<sup>1)</sup>には、「川越道」「八王子道」「秩父道」「桶川道」「熊谷道」「比企観音道」「吉見観音道」「大谷村道」などが書かれている。しかしこの古地図では、村や寺社、山や川などの位置関係はわかるが、道の位置を確認することはできない。

資料を探していると、明治前期測量2万分1フランス式彩色地図～第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖復刻版～(以下「彩色地図」という。)に出会った。実際にこの地図を用いて昔の道を辿り、昔の道の位置や現在の道の様子を確認し、当時の人々が残したものを探すことにした。

## 2. 彩色地図について

「明治前期測量 2 万分 1 フランス式彩色地図

～第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖復刻版～」

関東平野のほぼ全域を明治13年から18年にかけて参謀本部が測量を行ったもので、わが国の近代地図作成史上の最高傑作と言われている。

この迅速測図原図の原本は、測量の平板に紙を貼り測量の画線を直接書き込んで最後に彩色を施した。当時の測量技師による手書きの原図そのもので印刷物ではない。この彩色による地図作成はフランスの技術を取り入れたもので、フランス式彩色地図と呼ばれる。

迅速測図原図には、当時の土地利用の状況、流入河川や湖岸の形状及び集落の家屋一軒一軒が正確に記録されており、明治になって十数年しか経っていない、即ち江戸時代末期とほとんど変わらない当時の様子を偲ぶことができる。

その後、地図作成はフランス式からドイツ式に改められ、フランス式彩色地図は作られなくなる。なお、この成果を使用してドイツ式による1色(黒)刷の二万分一迅速測図が後に刊行される<sup>2)</sup>。

このため迅速測図原図は日の目を見ることなく、倉庫で長い眠りにについていた。平成3年に復刻版が発行されるが、約1000枚を一括にした限定販売だったため高価になり、一般の人に行き渡らなかった。平成8年、広い分野で利用できる様に復刻する地域を限定し再度復刻版が出されたのである。<sup>3)</sup>

※ この地図は陸地測量標条例(明治23年3月26日施行)以前の地図であるため、測量法の対象範囲外である。

※ この研究課題では、彩色地図を見やすくするために拡大し利用した。

## 3. 道の名称について

江戸時代、街道名は幕府や地域支配者によって定められたものではない。

幕府が街道名を定めた事例として出されるのは、享保元年(1716年)五街道の名称だけである。<sup>4)</sup> 限られた地域内で通用する道の名称があれば、日常生活に支障はなく統一する必要もなかったのである。

また、同じ道でも場所によって名称は異なる。たとえば、熊谷と川越を結ぶ道は、熊谷では「川越道」、川越では「熊谷道」と呼ばれていた。また、「江戸道」と呼ばれる江戸に向かう道は県内各地に見られた。<sup>5)</sup>

#### 4. 辿る道の選定について

彩色地図を使って歩く道は、『東松山市の歴史 中巻』<sup>6)</sup> に載っている「川越・熊谷道」「秩父道」「日光道」と、人々の信仰を集めた「秋葉神社」「箭弓稲荷神社」「岩殿観音」へ向かう道、そして、きらめき市民大学周辺に関わる道を選んだ。

ただし、彩色地図に載っている上記の道でも、現在交通量が多い道は、なるべく彩色地図に載っている並行する脇道を歩くこととした。

なお、表記する地名については、彩色地図に載っているものを採用した。

また、このまとめの中で使われる「昔の道」とは、江戸末期から明治初期の道を指す。

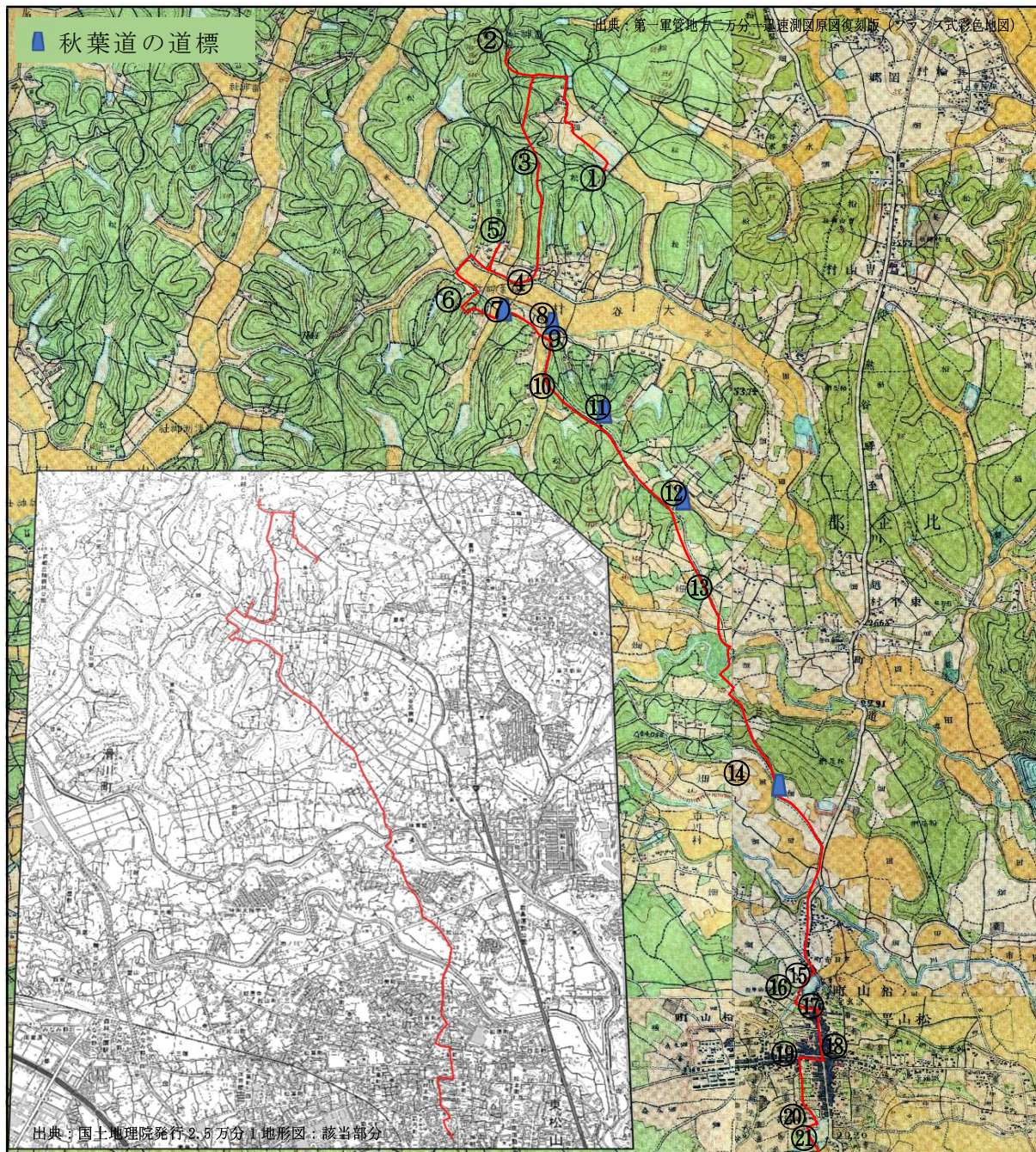
#### 5. 活動記録

No.	月/日	場所	内容
1	2/13	校内	班員の役割分担、テーマについての意見交換
2	2/20	校内	テーマの選定
3	2/27	校内	資料配布
4	3/5	校内	歩く道の選定
5	3/19		一の巻 秋葉神社への道 (大谷村から松山町)
6	3/26		二の巻 秩父道 (高坂村から菅谷村)
7	4/2	大岡市民活動センター	クラス懇親会后、新型コロナウイルス対応検討
8	6/4		三の巻 日光道、熊谷道 (高坂村、毛塚村、田木村、正代村)
9	6/18		四の巻 日光道、熊谷道 (高坂村から松山町)
10	7/9	校内	実際に歩いた感想の意見交換
11	7/16		五の巻 日光道、熊谷道 (東平村、小八林村、胃山村、岡郷)
12	7/30	校内	実際に歩いた感想の意見交換
13	9/3	校内	カリキュラム中止を受けて今後の活動について
14	10/8	校内	課題研究のまとめ方についての意見交換
15	10/15		六の巻 箭弓稲荷神社への道 (戸守村から松山町)
16	10/22		七の巻 きらめき市民大学周辺に関わる道
17	11/12		八の巻 岩殿観音への道 (高坂村から岩殿観音)
18	11/26	校内	課題研究のまとめ
19	12/3	校内	課題研究のまとめ
20	12/10	校内	課題研究のまとめ

## 6. 彩色地図を辿る

### 一の巻 秋葉神社への道 (大谷村から松山町 約 9.5km)

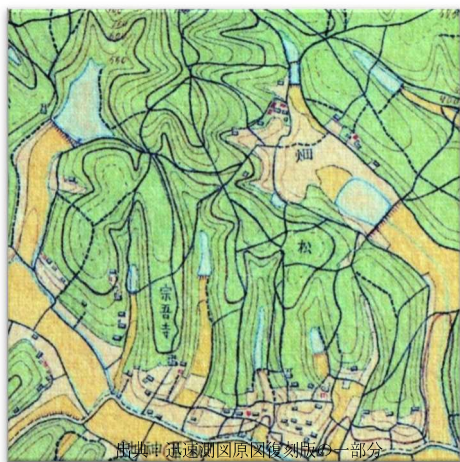
— は辿った道



①大岡市民活動センター	②大雷神社	③大雷神社参道
④大雷神社鳥居	⑤宗悟寺(曹洞宗)	⑥秋葉神社
⑦道標「秋葉神社」	⑧道標「秋葉神社」	⑨庚塚の石仏石塔群
⑩大谷伝説の里コース	⑪道標「秋葉神社」	⑫道標「秋葉神社」
⑬昔の雰囲気のある道	⑭道標「秋葉神社」	⑮日吉神社
⑯松山神社	⑰八雲神社	⑱本町広場の道路元標
⑲旧城恩寺のクランク	⑳福聚寺(天台宗)	㉑下沼公園

## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 谷田とため池、村人の守り神 ②⑥



大谷村は、彩色地図において緑の森、水色のため池、薄茶色の畑、茶色の田。見事にどの谷にもため池と田畑が見える。

谷の奥に設けられた、ため池の水で灌漑する谷田は近世以前から比較的安定した水田であったと思われる。<sup>7)</sup> 鎌倉時代の比企氏関連の伝承が数多く残されているのもそのためだろう。

山の上の大雷神社だいらいは、水分神社みくまりとも呼ばれ、干ばつときは雨乞が行われていた<sup>8)</sup>。ため池に依存する大谷村では、大雷神社は村人にとっ

て大切な神様だったのである。

また、大谷村には江戸時代の領主森川氏がかんじょう勸請したひぶせ火防の神とされる「秋葉神社」がある。火防の祈禱きとうは古くから行われていたが、明治から昭和初期にかけては、養蚕祈禱も盛んにおこなわれ、明治5年に「秋葉道」と呼ばれる参拝道を作り、所々に道しるべが置かれた。<sup>9)</sup> 下の写真は、辿った道で見つけた「秋葉道の道標」である。



⑦ 道標



⑧ 道標



⑪ 道標

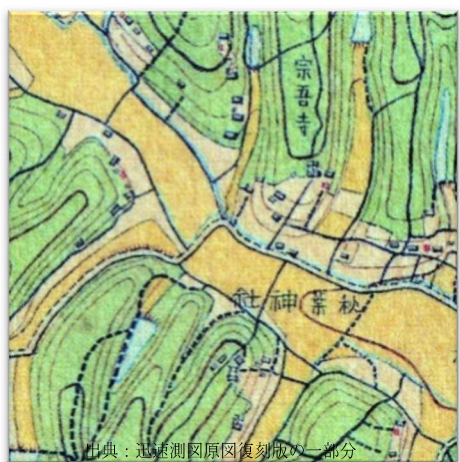


⑫ 道標



⑭ 道標

### 2) 森川氏陣屋跡 ⑥周辺

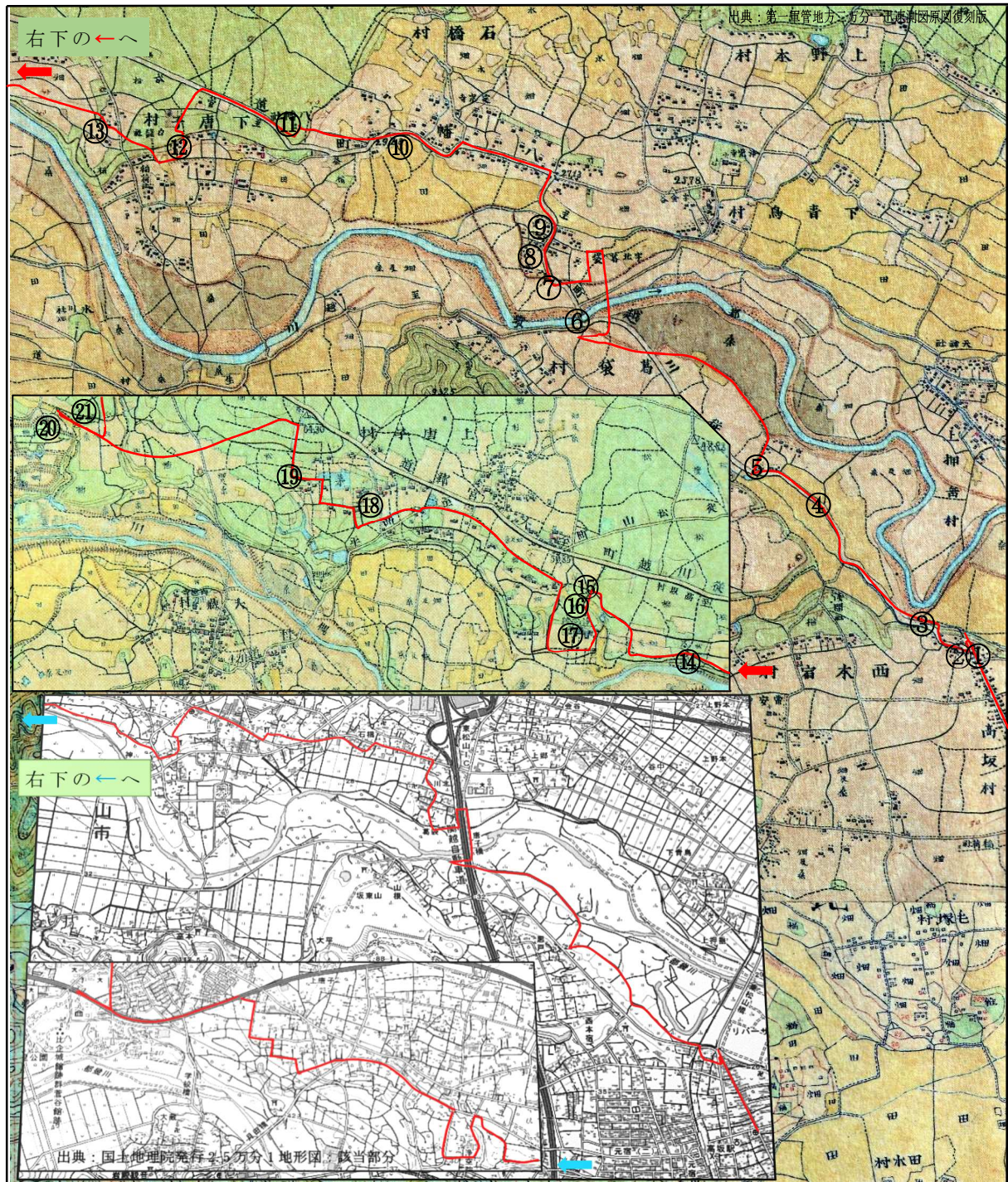


『新編武蔵風土記稿』には、地頭森川美濃守みののかみ陣屋が「村の西にあり、反別三町許り、先祖金右衛門氏うじとし俊当所を賜りより後、しばらく在住せしが、後江戸へ移りてより、家人を置いて守らしむ」とある。陣屋は、秋葉神社の裏にあったとされている。

残念ながら、陣屋の遺構となるものは見つかっていない。また、幕末まで森川氏の所領であったが、彩色地図の該当地域には何も書かれていない。

しかし、小高い丘を利用し、大きな門、長い塀、御用場、長屋、土蔵。前の丘には秋葉神社、門の外には高札場。そして陣屋の前に田畑、その先には宗悟寺。その当時の人々の生活風景が浮かんでくる。

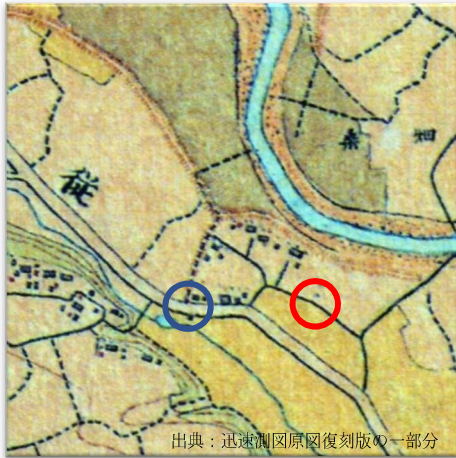
二の巻 秩父道（高坂村から菅谷村 約 13.5 km）



①道標「八王子道」	②共同墓地（蓮台寺跡）	③石橋供養塔・道標
④河川敷の道	⑤悪戸耕地の石仏石塔群	⑥天神河原の渡し
⑦葛袋川北公会堂石仏石塔群	⑧石灯籠（石尊様）	⑨ふせぎ
⑩石灯籠「阿夫利神社御神燈」	⑪若宮八幡宮（若宮八幡古墳）	⑫唐子神社
⑬下唐子2号墳	⑭昔の雰囲気のある道	⑮馬頭観音・道標
⑯同性塚	⑰浄空院（曹洞宗）、菅沼氏一族の墓	⑱石仏石塔群
⑲昔の雰囲気のある道	⑳菅谷城跡	㉑稲荷塚古墳

## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 消えた集落 ⑤周辺



彩色地図には、悪戸耕地の中に集落がある。しかし歩いたときに家はなく、雑草に覆われていた。

田畑の中にポツンとあった祠は○の場所であり、○の場所に石仏と石塔が集まっていた。

石仏等の年代がわかるものは、宝永4年(1707年)の阿弥陀如来から明治2年(1869年)の「九頭龍大神」である。

「雨降山」と刻まれた常夜燈は、安政6年(1859年)に作られ、明治41年(1908年)に「修善」と台座に彫られている。修繕されたのだろう。



三体の地藏菩薩の傷みが激しく、お顔が新しくなっていたり、体がつなげられたりしていた。悪戸耕地が洪水の被害に遭い壊れてしまったのだろう。

明治40年(1907年)に安政6年以来の大出水の記録があり、明治43年(1910年)には、明治最大の大洪水が起こる。

村人たちは、石仏をここに集め、ふせぎで結界を作り、集落が再び洪水に遭わないように願った。住民によると、70年ぐらい前に多くの家は高台に移転し、

現在悪戸耕地は、下流の家や耕地を守る遊水地としての役割を担っているという。

### 2) 残っていた石塔 ⑥



江戸時代は、「天神河原の渡し」があり、船で向こう岸に渡っていた。葛袋墨引絵図<sup>10)</sup>には、川のそばに茶屋の様な家が描かれている。旅人が休んだり、船頭が待機したりしていたのかもしれない。

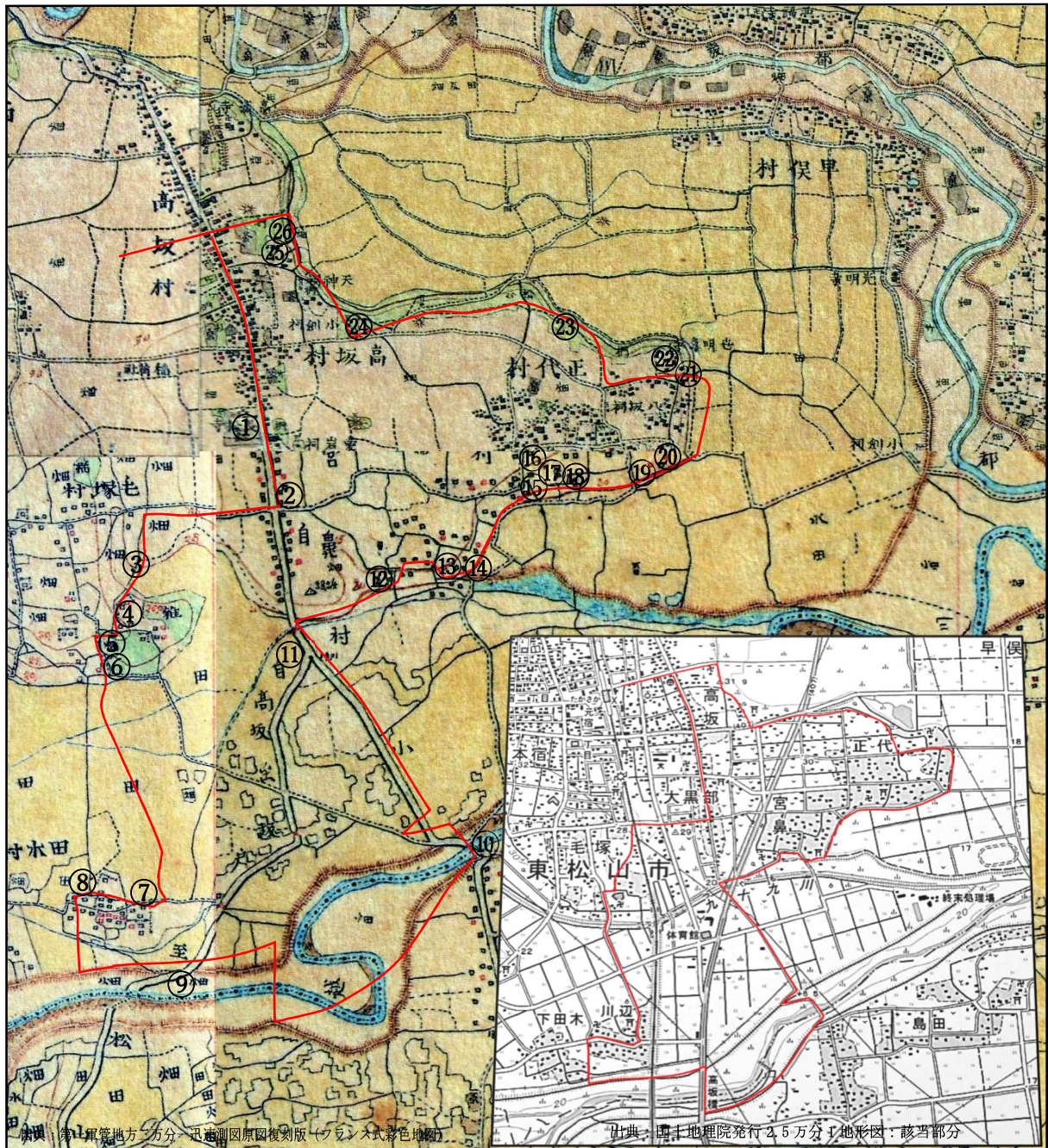
河川敷の中に寛政9年(1797年)と天保10年(1839年)の馬頭観音を見つけた。

洪水や河川の氾濫に幾度となく遭いながら、地域の人々に守られて200年近くの年月を越え、今もこの地にある。



河川敷の馬頭観音

三の巻 日光道、熊谷道（高坂村、毛塚村、田木村、正代村 約9km）



①長松寺(浄土宗)	②六地藏、石仏石塔群	③昔の雰囲気を残す道
④巡拝塔	⑤坂本家代々の墓地	⑥毛塚薬師如来坐像
⑦神明神社	⑧慈眼寺(真言宗智山派)	⑨吉田の渡し跡(想定)
⑩島田宿、島田の渡し跡	⑪江戸道八王子道合流点	⑫香林寺(曹洞宗)
⑬宮鼻八幡神社	⑭庚申塔	⑮青蓮寺下の清水
⑯青蓮寺(天台宗)	⑰小代氏館跡	⑱御霊神社
⑲東形の清水	⑳大下の清水	㉑観音下の清水
㉒世明寿寺(曹洞宗)	㉓昔の雰囲気を残す道	㉔高坂神社
㉕東光院(天台宗)	㉖東光院下の清水	



## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 越辺川を渡る ⑨⑩

越辺川には、「吉田の渡し(毛上戸の渡し)⑨」と「島田の渡し⑩」があった。

吉田の渡しは、八王子千人同心や日光詣での人々に利用された。また、島田の渡しは、江戸や川越から秩父大宮郷や熊谷・西上州に行く人々に利用された。

現在、島田の渡しは、街道沿いの家々、洪水や河川の改修などにより集められたらう石仏石塔群が、坂戸市側の土手に並び当時の風情を忍ばせている。

東上線の越辺川橋梁付近と思われる吉田の渡しには、残念ながら何も残されていない。明治になり日光へ向かう人々が減り、吉田の渡しは役目を終えたと思われる。彩色地図では、島田の渡しに橋が架かっている。

八王子道と川越道の合流地点⑪に道標がある(上)。多くの人々で、この先の高坂宿はにぎわっていたであろう。



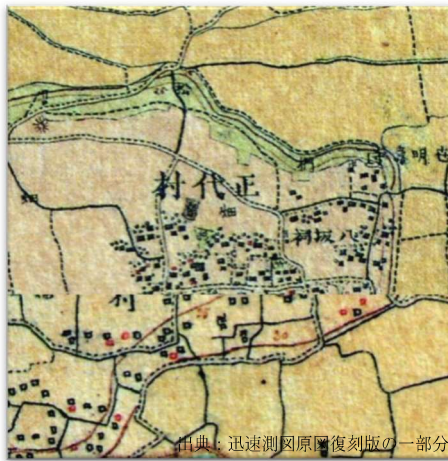
島田の渡しの土手にある石仏群



(左)	(正面)	(右)
施主	左 右	安永三
大黒	江戸道	八王子道
部		甲午
村		午三月
中		吉日

(1774年)

### 2) 正代地区の小代氏 ⑰



出典：迅速測図原圖復刻版の一部分

正代地区は、久寿2年(1155年)に起こった大蔵館の戦いで、源義朝の嫡子、鎌倉の悪源太こと源義平が「岡の屋敷」を構えた所と言われている。義平の乳母は児玉経行の娘であり、後にここが児玉党の小代氏の館となる。<sup>11)</sup>

正代地区の小字名には、西形、中形、東形、駒形などがある。「形」は屋形の省略形で豪族の館という意味であり、西の館、中の館、東の館、そして牧場があった場所である。中形の青連寺あたりにその拠点の館が存在したと考えられ、空堀と土塁が確認されている。

また、鋳物師や仏師もいたことがわかっている。<sup>12)</sup> 高坂大地が東に張り出したこの場所は小代氏の一大拠点であったのだろう。

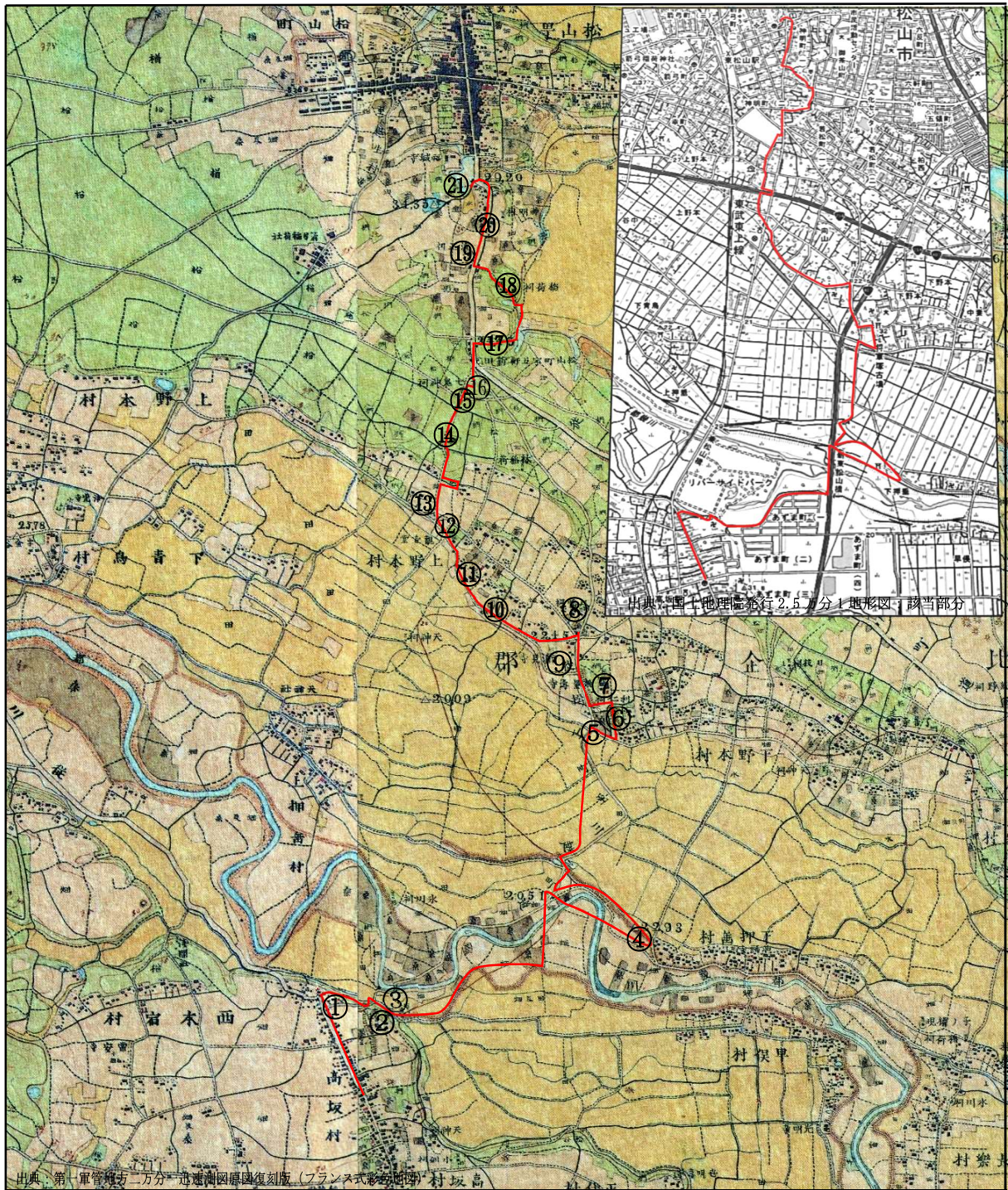
御霊神社は、『小代行平置文写』によると「悪源太殿を御霊と祝ひ奉る」とあり、源義平を祀っている神社で、行平は子孫に対し、厚く崇敬するよう遺訓している。<sup>13)</sup>

宮鼻八幡神社のケヤキは、樹齢約700年と言われ、<sup>14)</sup> 小代氏が活躍した時代から人々と共に生きてきた木である。



八幡神社のケヤキ

四の巻 日光道、熊谷道（高坂村から松山町 約7km）



① 道標「八王子道」	② 高濟寺、加賀爪氏累代の墓	③ 石橋、石橋供養塔
④ 氷川神社	⑤ 野本村道路原票	⑥ 將軍塚古墳、利仁神社
⑦ 無量寿寺(曹洞宗)、野本氏館跡	⑧ 八幡神社	⑨ 清見寺(曹洞宗)
⑩ 馬頭観音	⑪ 松尾芭蕉の碑	⑫ 上野本共同墓地
⑬ 庚申供養塔	⑭ 昔の雰囲気を残す道	⑮ 七鬼神社
⑯ 通称首無地蔵	⑰ 昔の雰囲気を残す道	⑱ 二尾稻荷神社
⑲ 上田朝直建立青石塔婆	⑳ 旧道	㉑ 下沼公園

## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 八王子道の道標 ①

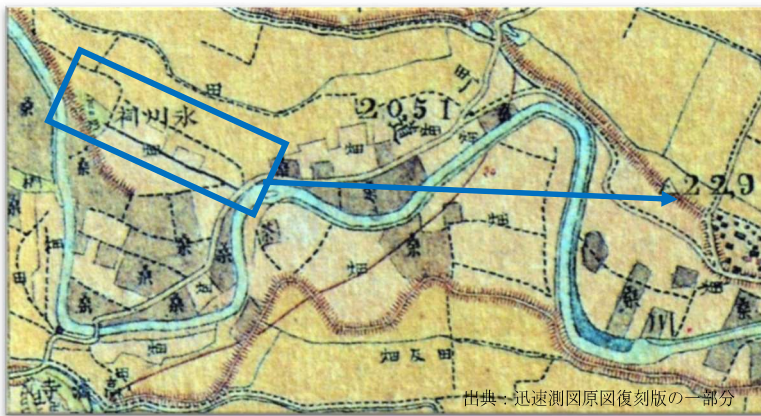
この道標は、高坂宿の北の端に嘉永 7 年(1854 年)の「奉納<sup>けいはいれい</sup>経<sup>けい</sup>拝<sup>はい</sup>礼<sup>らい</sup>供養塔」と共にある。「ひきいわたの」は岩殿観音で正式には、<sup>いわどのさん</sup>巖殿山正法寺という。坂東三十三か所 第十番札所である。「よしみいわたの」は、吉見町の岩殿山安楽寺、坂東十一番札所、吉見観音の名で親しまれてきた。

(裏)	(左)	(前)	(右)
安永 十 天 正 月 吉 日 高 坂 宿	左 ち ぶ	八 王 子 道	右 日 光
	い ひ わ き の 道		い よ し み の 道

(1781 年)



### 2) 氷川神社の移動 ④



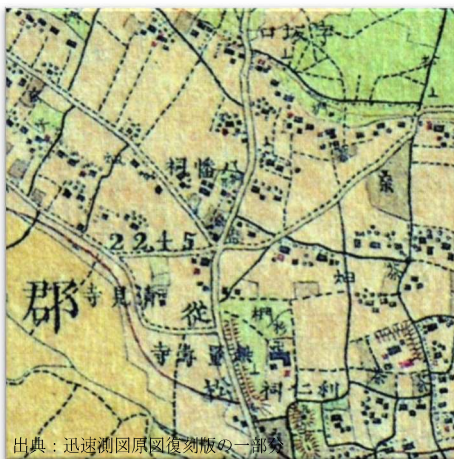
出典：迅速測図原図復刻版の一部

彩色地図には長い参道を持つ氷川神社が描かれている。

押垂村は天和 2 年(1682 年)以降に行われた都幾川、越辺川の改修の影響により、押垂の自然堤防の浸食が進み、水害が起こるようになった。水害を和らげようと、享保元年(1716 年)大宮の氷川神社の分霊を祀った。その効果も空しく、住民は上流・下流の自然堤防にそれぞれ移転して、上押垂、下押垂に分かれて居住するようになる。

氷川神社は昭和 50 年(1975 年)に都幾川の改修工事のため、250m 下流の下押垂水塚に移された。境内の配置はあったままの状態でも復元されているが、参道は三分の一程度に縮小されている。<sup>15)</sup>

### 3) 五差路と高札場 ⑧周辺



出典：迅速測図原図復刻版の一部

八幡神社の前に五差路がある。旅人だけでなく村人の往来も多かっただろう。

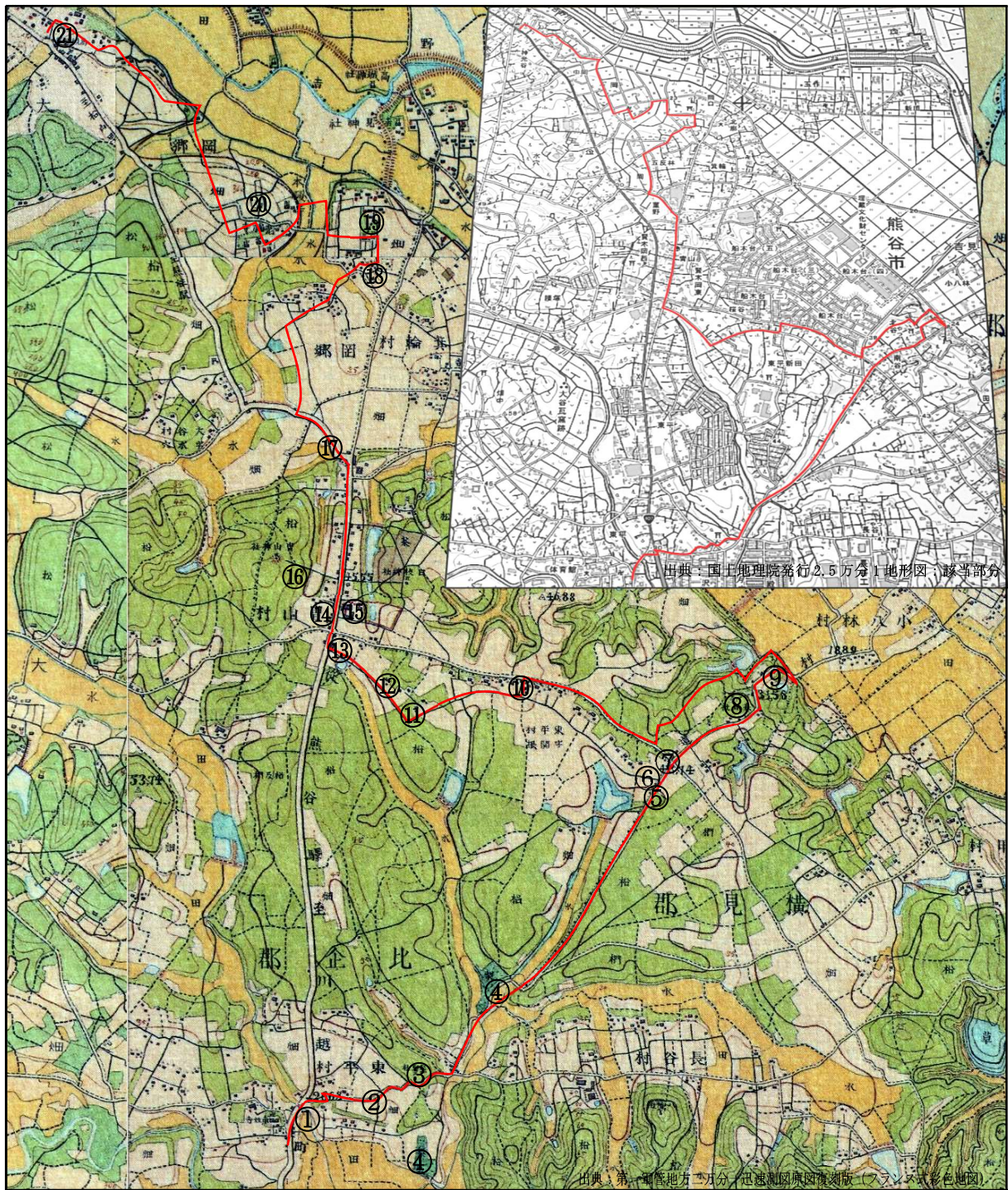
東松山市では、本町一丁目交差点辺りに、松山本郷の高札場が確認されており、「札の辻」と言われていた。<sup>16)</sup>

『新編武蔵風土記稿』の野本村には「高札場三ヶ所 小名 金谷 曲輪 在家」とあり、この辺りは小名在家である。野本村絵図<sup>17)</sup>には、まさに「高札」と描かれている。道の集まる「辻」は、人々の行き交う場所であり、昔の人が残したのを見つかることも多い。



高札場図の例

五の巻 日光道、熊谷道（東平村、小八林村、青山村、岡郷 約 9.5 km）



① 地蔵菩薩(道標)・馬頭観音	② 昔の雰囲気を残す道	③ 熊野神社
④ 梨園跡	⑤ 旧道	⑥ 観音菩薩、地蔵菩薩
⑦ 昔の雰囲気を残す道	⑧ 春日神社	⑨ 馬頭観音等
⑩ 庚申塔	⑪ 馬頭観音	⑫ 地蔵菩薩等
⑬ 庚申塔、地蔵菩薩	⑭ 根岸家墓地	⑮ 根岸家
⑯ 青山神社、青山古墳	⑰ 旧道	⑱ 馬頭観音
⑲ 玉太岡神社	⑳ 光福寺(曹洞宗)	㉑ 上岡馬頭観音

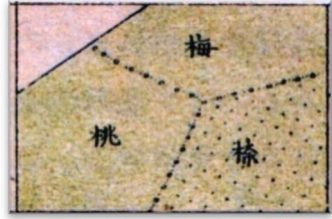
## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 東平の梨 ④



彩色地図には2か所に黒の点線模様を青で彩色し「梨」と記入されている場所がある。

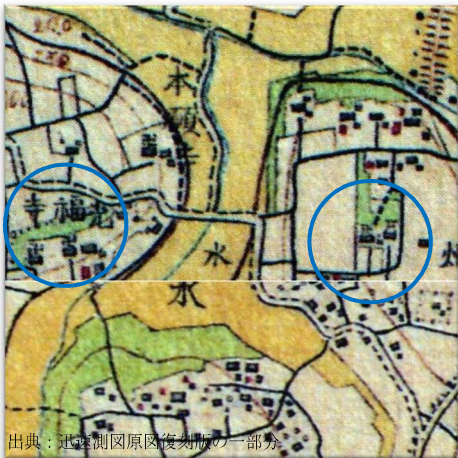
明治10年(1877年)に東平の農民が梨の栽培を始めたが、剪定も栽培法も未熟だったため10年間は全くの無収入だったという。<sup>18)</sup> 東平村の彩色地図は明治17年(1884年)に出来ているので、初期の梨園はここだった可能性が大きい。



測量軌典付図第八版「定式符号及顔料表」より

地図に表示する記号や文字等、すべての事項を定めた規定を「図式」というが、<sup>19)</sup> 彩色地図では明治13年編集の「測量軌典」がこれにあたる。<sup>20)</sup> 測量軌典付図第八版「定式符号及顔料表」に「梅、桃、<sup>そくりょうきてん</sup>梨」が載っている。「梨」は「<sup>そくりょうきてん</sup>梨」と同じ表示である。「<sup>そくりょうきてん</sup>梨」は「梨」なのか、あるいは別の果樹なのだろうか。

### 2) 玉太岡神社と光福寺 ⑱⑳



玉太岡神社がある場所に社が二つ描かれている。「神明社」と「雷電社」である。明治の神仏分離令により二社を持っていた雷電寺が廃寺になり、明治4年に当地の古称を採って「玉太岡神社」として相殿で村社になった。

境内に樹齢300~400年と推定されるムクノキ(御神木)がある。昭和42年の台風で一本が倒れるまでは、2本のムクノキは拝殿を両方から挟むような形になっていた。<sup>21)</sup>

残るムクノキも、幹の空洞化による倒木の恐れや枝が社殿の屋根に落ちる危険性があるが、

地元の人々に大切に見守られている。

光福寺は、嘉元4年(1306年)の銘を持つ板石塔婆と元享3年(1322年)に建てられた宝篋印塔があり、鎌倉時代末期にこれらの仏教的行為をここで行った中世武士がいたことを示すものである。<sup>22)</sup>

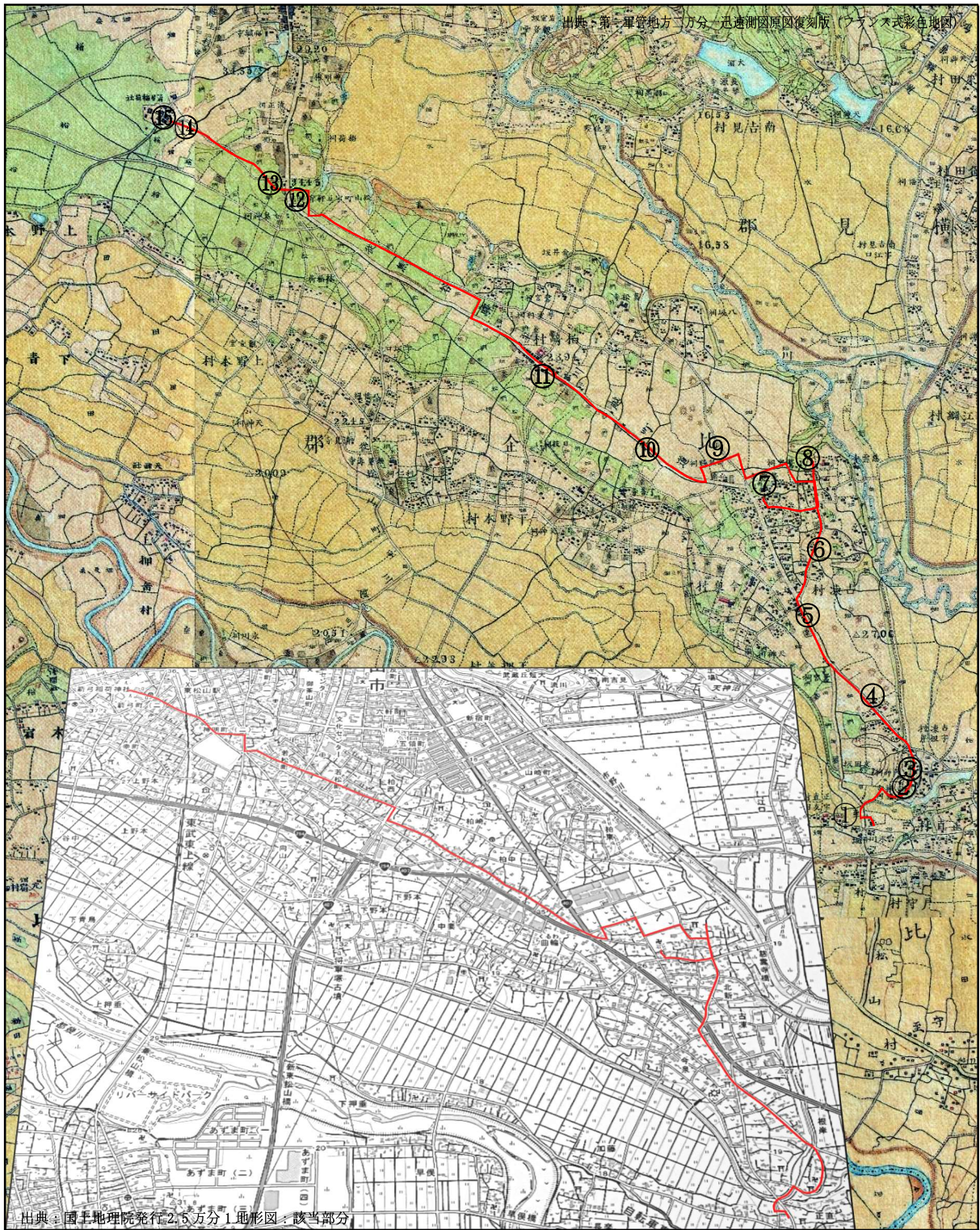
また、寺院内には光福寺裏1号墳があるが、説明板等はない。古墳には何も残されていないが、根岸武香により発掘が行われたらしい。



光福寺裏1号墳

文字の記録に残されなかった庶民の暮らしが垣間見える石仏や石塔、また祠や古墳などを後世に残すためには、私たちが関心を持つことが第一歩になる。

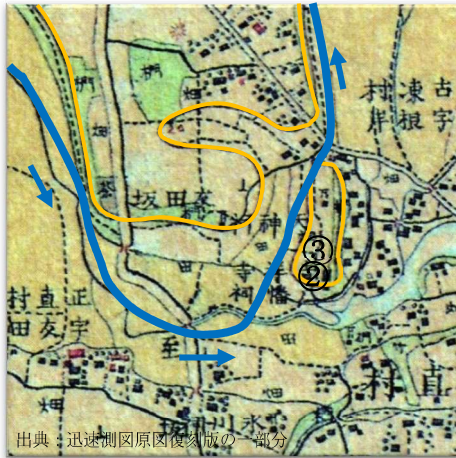
六の巻 箭弓稲荷神社への道(川越道) (戸守村から松山町 約 7.5 km)



① 元正院[住所：川島町正直]	② 八幡宮	③ 吉祥寺(天台宗)
④ 庚申塔、馬頭観音等	⑤ 現代の石塔	⑥ 残された三角地
⑦ 等覚院(天台宗)	⑧ 鷲神社	⑨ おくま山古墳
⑩ 石塔(墓石)	⑪ 供養塔	⑫ 道標「左箭弓稲荷道」
⑬ 箭弓稲荷神社大鳥居	⑭ 石塔「箭弓稲荷神社」	⑮ 箭弓稲荷神社

## 発見！昔の道、昔の風景

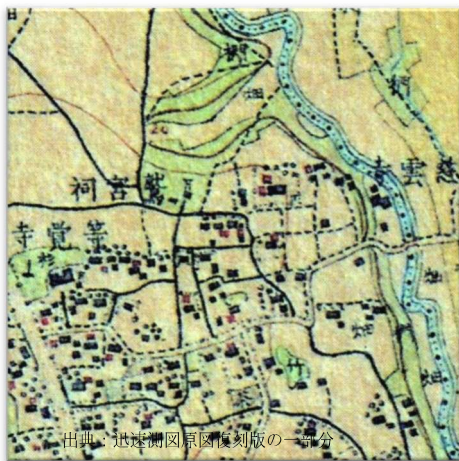
### 1) 新江川の流れ ②③



新江川は、関越自動車道東松山インターチェンジ付近に源を発し、流域における農業用排水、公共下水道(雨水)を集流して一級河川市野川に合流している。<sup>23)</sup> 彩色地図に現在の新江川の川筋を書き入れると、標高 20m の等高線(黄色)の間を自然の地形を利用して川を作り、根岸の台地沿いに市野川まで北上している。

この河川工事ため、八幡宮と吉祥寺のある台地の形は変わり、吉祥寺の墓地も反対側の高台に移ったという。

### 2) 阿弥陀如来坐像 ⑦



訪れた日は偶然にも「阿弥陀如来坐像」の御開帳の日にあたり、拝観することができた。

仏像の様式は藤原末期の手法を継承しているが、強さの現れた肉どりや写実的な傾向のある目鼻立ちから鎌倉時代の作品に間違いはない。昭和 26 年(1951 年)に修理した際、胎内にあった墨書銘に建長 5 年(1253 年)に修理させたことが明記されおり、それ以前に作られたことは明らかである。<sup>24)</sup>

文久と明治年間に火災に遭い、阿弥陀堂と脇侍の観音・勢至の二菩薩像を焼失している。昭和 51 年(1976 年)に耐震不燃の御堂を建立し、阿弥陀如来坐像を安置。<sup>25)</sup>

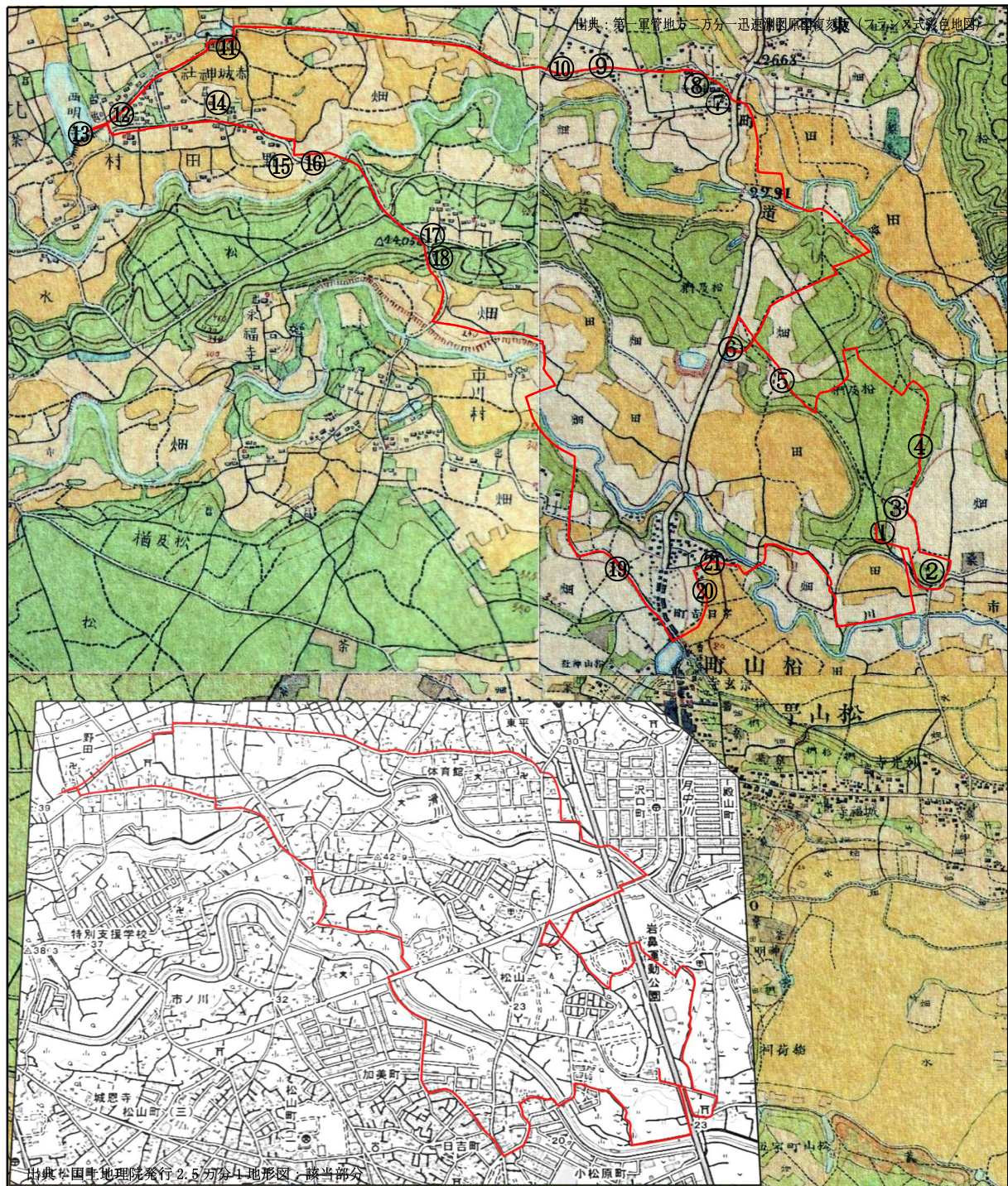
拝観した際、阿弥陀如来坐像だけが、高床式の蔵の様な御堂に安置されていたので不思議に思った。この御堂で、この神々しい綺麗な阿弥陀如来をこのまま後世に残して欲しいと願う。

昭和 44 年(1969 年)に、慈雲寺は等覚院と併せられ「慈雲山 等覚院 来迎寺」となる。<sup>25)</sup> 元慈雲寺の敷地には墓地だけが残されている。



阿弥陀如来坐像

七の巻 きらめき市民大学周辺に関わる道 約 10 km

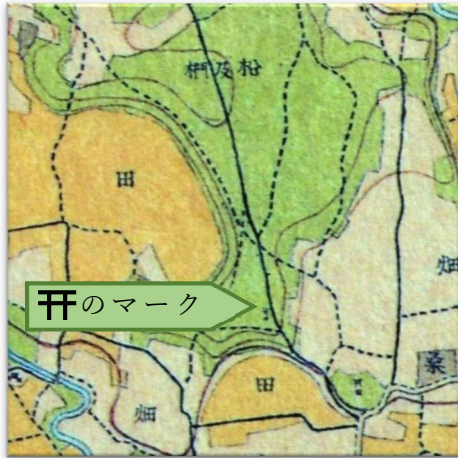


①道標「此方諏訪神社」	②菅原神社	③407号に分断された道
④昔の雰囲気のある林	⑤昔の雰囲気のある道	⑥道標「行田海道・熊谷海道」
⑦覚性寺(真言宗智山派)	⑧馬頭観音	⑨神明社・馬頭観音
⑩地藏菩薩	⑪庚申塔、山岳信仰(台座が道標、)弁財天	⑫西明寺(曹洞宗)
⑬西明寺沼、大黒天	⑭赤城神社	⑮地藏菩薩、観音菩薩、馬頭観音等
⑯土地改良で分断した道	⑰地藏菩薩、念仏供養塔	⑱八雲神社
⑲日吉町内の昔の道	⑳昔の雰囲気のある道	㉑勢至堂跡共同墓地



## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 諏訪神社道標 ①



きらめき市民大学の前の道を下っていくと道路の右端に道標がある。明治 41 年 (1908 年) に造立されたもので、「此方 諏訪神社 右白坂 熊谷道 左本宿吉見道」と記してある。

元文元年 (1736 年) の古地図<sup>26)</sup> に市民大学周辺を諏訪原、そこに神社と思われる絵の脇に諏訪と書かれており、これが諏訪神社と推測される。

市民大学の敷地は古墳 (岩鼻 2 号墳) と諏訪神社が鎮座していた丘陵であった。古墳の中心は体育館裏、諏訪神社は駐車場端の炊飯場あたりだった。



諏訪神社道標

### 2) 菅原神社 ②

階段を下って入る神社は珍しい、降りてみると新しい道がかさ上げされていただけで、境内には階段を上っていく。狛犬ならぬ臥牛 (伏せた牛) が待受ける。

地元の人には「天神様」と呼ばれている。

鳥居は、安永 4 年 (1775 年) に「松山本郷元宿氏子講中」が奉納したと読み取れる。

彩色地図では、菅原神社と松山本郷元宿は都幾川と田を挟んで約 700m、視線を遮るものではなく、元宿から菅原神社の杜が眺められたらう。



菅原神社前道路下

### 3) 地蔵沼近くの地蔵菩薩 ⑥

分かれ道の地蔵菩薩 (右) は、宝暦 2 年 (1752 年) に造立。台座が道標になっており、熊谷・行田を案内している。この先の東平にも行田を案内する地蔵菩薩がある。

ただ、ここから行田に続く道は、彩色地図に見つけることができない。

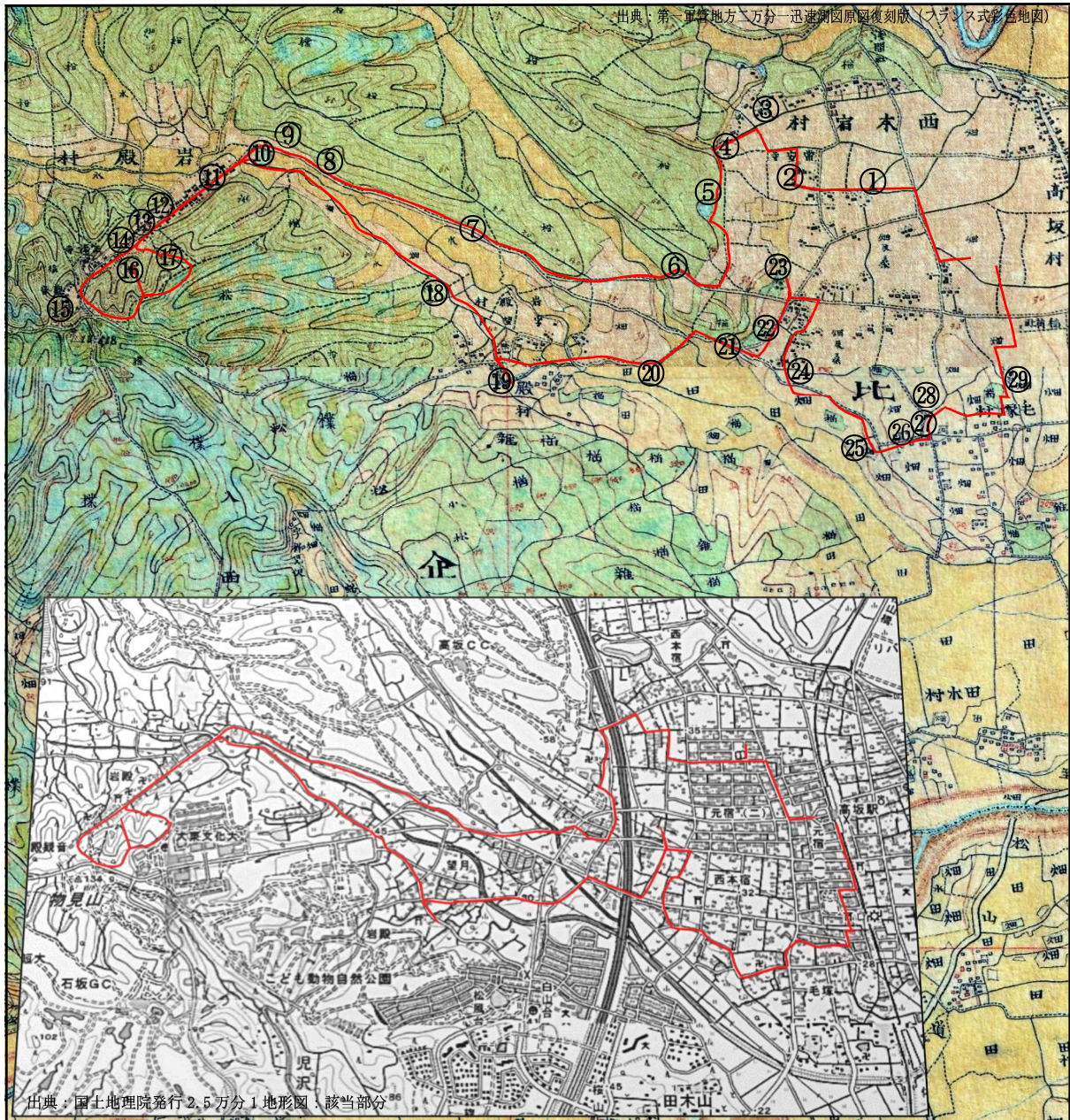
また、「海道」の字が使われている。明治のある時期まで、庶民の間では、

「街道」ではなく「海道」が使われていた。<sup>27)</sup>



(台座)			
(左)	(正面)	(右)	
俱会 (八人の戒名がある)	宝暦二壬申 歳極月吉日	熊谷海道 三里半	右 行田 四里半 施主 岩崎喜右衛門

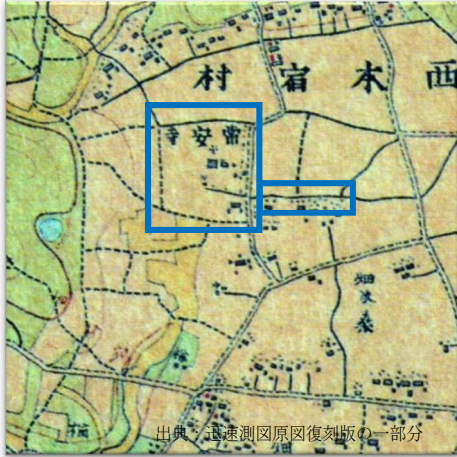
八の巻 岩殿観音への道（高坂村から岩殿観音 約 11.5 km）



①常安寺大門墓地	②常安寺跡	③地蔵菩薩
④地蔵堂、ふせぎ	⑤常安寺・米山薬師堂	⑥昔の雰囲気のある道
⑦昔の雰囲気のある道	⑧足利基氏の累跡	⑨阿弥陀堂・石板塔婆
⑩鳴かずの池	⑪岩殿門前町	⑫正学院
⑬正存院	⑭熊野神社	⑮正法寺(真言宗智山派)・岩殿観音
⑯正法寺六面幢	⑰判官塚(比企大神)	⑱石塔、ふせぎ
⑲天神社(岩殿)	⑳鎌倉街道跡碑・地蔵菩薩	㉑鈴留橋
㉒墓地	㉓閻魔堂	㉔石塔「神社仏閣供養塔」
㉕北向き地蔵	㉖地蔵菩薩、馬頭観音	㉗昔の雰囲気のある道
㉘毛塚2号墳	㉙天神社(元宿)	

## 発見！昔の道、昔の風景

### 1) 常安寺跡 ②



彩色地図では、常安寺が現在地より 500m 東の米沢にある。戦後、現在の米山地区に移転した。寺の総門とそれに続く参道があった場所が大門である。高坂図書館あたりで、北側の墓地が大門墓地と呼ばれている。<sup>28)</sup>

現在、常安寺跡には墓地が残されている。彩色地図では道で区切られた大きな敷地が常安寺になっているようである。

辿った道には、墓地が幾つかみられた。寺の移転によるものか、常安寺持ちの墓地も多い。

### 2) 正法寺六面幢 ⑩



六面幢

鎌倉時代、源頼朝は観音信仰に厚く、坂東三十三観音霊場を制定したと推測され、頼朝は比企氏が深く帰依した岩殿観音を庇護し、岩殿観音は坂東札所十番となる。

室町時代になると、一般庶民も巡礼に出る様になり、戦国時代後期には、「本坊他、六十六の僧坊を有し、関東や北国にも並びなき大伽藍を構え七堂あった伽藍はことごとく瓦葺きであった。」と記録にのこる。

永禄 4 年(1561)松山合戦の際、北条氏康により岩殿観音をはじめとする付近の寺社はすべて焼き払われた。

7 年後、僧栄俊により護摩堂が再興、その後松山城城主上田案獨斎の庇護を受け、天正 5 年(1577 年)に七堂伽藍をはじめとして再興を果たす。<sup>29)</sup>

六面幢は、天正 10 年(1582 年)2 月に、岩殿山の僧道照が中興開山の僧栄俊の弟子らの菩提を供養するために建立されたものと思われる。<sup>30)</sup>

寺や神社は時代を越えて存続することが多く、その歴史は地域の歴史でもある。

### 3) 屋根の上の狛犬 ⑭

岩殿観音の門前町にある熊野神社は、狛犬が屋根の上にいる。谷合で敷地が限られているためなのか、近くの住民に聞いてみたが理由は不明。

沖縄のシーサーに似ている。シーサーは昔、単体が基本で、屋根の上に上がったのは庶民が瓦葺を許された明治以降からである。しかも、阿吽で一対、尻尾をあげるシーサーは狛犬の影響を受けているという。<sup>31)</sup>



屋根の上の狛犬

## 巻の外

### 1) 松山の松



松山城は、秩父山地に続く吉見丘陵の西南端に築かれた山城で、背後は奥深い松山が続き、前面に流れる市野川を天然の堀とした。その松山城の領内を松山領あるいは松山庄と総称するようになり、その城下町で人家が密集したところを松山城の本郷、すなわち松山本郷と呼ぶようになった。<sup>32)</sup>

彩色地図でも、東松山市域の緑色に塗られた部分は、「松」が圧倒的に多く「松山」であった。しかし現在、ほとんど松林を見ることはできない。比企地方は、昭和50年頃から害虫である松くい虫の被害に遭うようになり、昭和55年(1980年)に一部の松を除いて、松くい虫の駆除のため、一斉に伐採し消毒を行い処分されたのである。

### 2) 時代の波に<sup>ほんろう</sup>翻弄された迅速測図原図

近代、わが国の測量と地図作りは、明治2年(1869年)民部省戸籍地図掛が設けられたことに始まる。その流れは大まかに分類すると、文官系である内務省(イギリス式)と武官系である参謀本部(フランス式)との二元的に行われていた。

その後、陸軍の軍政は普仏戦争で圧倒的な勝利を収めたドイツ式に切り替わる。

明治14年(1881年)に「地図密売事件」が起こる、この事件により、フランス派は一掃され、作成される地図からもフランス流の彩色は消えていく。

やがて、地図作成は参謀本部の管轄に統一されて行った。<sup>33) 34)</sup>

そして、迅速測図原図は日の目を見ることなく、倉庫で長い眠りについた。

東松山市の歴史に興味を持つ私たちが、彩色地図に出会えたことはとても幸運だった。彩色地図の道を通り、この研究課題のレポートを作れたことは勿論だが、村民が普請した土手、今と変わらないため池、明治17年当時の前橋藩陣屋跡等々、彩色地図で東松山の史実を確認したことで、史実をより身近に感じる事ができたからだ。

迅速測図原図を作成した人々、守り続けた人々に感謝したい。

※「地図密売事件」<sup>35)</sup>

参謀本部において、軍港を含む一部の実測図が、軍人、画工により清国公使館に密売されようとした事件。実際には公知された地図であり外部流失しても問題なく、部内での清国向け地図作成も黙認されていた様子であった。しかし、陸軍裁判所は、容疑者6人を拘束し、軍事裁判で4人を有罪にする。容疑者のうち一人は獄中自殺、他の一人は無罪、またこの間、容疑者以外の関係者3名が不慮の死を遂げている。



出典：迅速測図原図復刻版

## 7. まとめ

東松山を南北に走る国道 407 号、南東から西に走る国道 254 号は、それぞれ彩色地図の川越熊谷道、川越(江戸)秩父道をルートとして、今に至っている。

今回、辿った「川越・熊谷道」「秩父道」「日光道」と「秋葉神社」「箭弓稲荷神社」「岩殿観音」へ向かう道、きらめき市民大学周辺に関わる道は、区画整理や土地改良、河川の改修などの事業により変わった以外は、ほぼ彩色地図の場所にあった。

道は私たちの生活様式の変化とともに、姿を変えている。道幅は広がり、舗装され、郊外により広くてスムーズな道が作られ、高速道路も整備される。

そして、人々は、速くて安全な新しい道を利用するようになる、しかし一度できた道は残り、無くなることはない。

辿った道で昔の人々が残したものは、寺や神社、石仏や石塔である。

明治の神仏分離令により、寺も神社も数を減らした。廃寺となった場所には地域の共同墓地が残り、神社は今もある神社の境内に合祀されている。

石仏や石塔は、置かれた場所が移っていたり、長い年月を経て風化が進み、痛んでいたりするものも多い。

だが、石仏や石塔は、村で行った庚申、伊勢参りなどの講の記念や水害の記録など、その当時の人々の生きていた証<sup>あかし</sup>として残され、私たちに昔の風景を想像させる。

今回、宮鼻八幡神社のそばに令和元年台風 19 号被害の水位を刻んだ石碑を見つけた。

この石碑の作られる過程を考えると、台風の影響を受け、石碑を作る意義や目的が提案され、具体的に石碑の素材、大きさ、刻む文字、資金、設置場所等々が検討され、様々な人が様々な形で関わって、石碑はここに置かれた。

今に残されている石仏や石塔も、作られた背景や作った人々の思いがある。

将来、新たな史実が発見され、東松山市の歴史のデータベース化や、石仏や石塔の詳細な分析が行われれば、その石仏や石塔が造立された風景ではなく、より詳しい事情が見えてくるだろう。

石仏や石塔の保存活動は必要なことであるが、事を起こすにはエネルギーが必要である。しかし、すぐにできることもある。石仏や石塔の前を通るときには畏敬の念を持って、心の中で手を合わせよう。そんな一人ひとりの思いが、未来に石仏や石塔を残すことにつながると信じて。



三の巻 ⑬  
宮鼻八幡神社下にある石塔

## 参考文献

- 1) 東松山市市史編さん課『東松山市史資料編第3巻』付図(2)  
「武州比企郡松山町小頭半三郎支配職場絵図 文政13年2月」東松山市 1983年
  - 2) 国土交通省関東地方整備局霞ヶ浦河川事務所「明治はじめの霞ヶ浦・北浦」  
[https://www.ktr.mlit.go.jp/ktr\\_content/content/000710770.pdf](https://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000710770.pdf) 閲覧日：2020年11月21日
  - 3) (財)日本地図センター企画編集部編集「明治前期手書彩色関東実測図資料編要約」
  - 4) 山本光正「海道・街道と交通路の名称」『通信総合博物館 研究紀要』  
第4号 2013年3月 P.5
  - 5) 吉本富男(編)『さいたま歴史街道：街道名称考』P.29～P.30 埼玉新聞社 1990年
  - 6) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 中巻』1985年 P.138
  - 7) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 中巻』1985年 P.100
  - 8) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.273
  - 9) 埼玉県神社庁『埼玉の神社 大里 北葛飾 比企』1992年 P.1025
  - 10) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 中巻』1985年 前見返し 葛袋村絵図
  - 11) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 上巻』1985年 P.383～P.384
  - 12) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.142
  - 13) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 上巻』1985年 P.384
  - 14) 東松山市ホームページ「名木ガイド(宮鼻八幡神社の大ケヤキ)」  
(<http://www.city.higashimatsuyama.lg.jp/kanko/shizen/meiboku/1351670866470.html>  
閲覧日：2020年11月21日)
  - 15) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.235～P.236、P.239
  - 16) 東松山市広報広聴課「広報ひがしまつやま」2015年5月
  - 17) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 中巻』1985年 後見返し 野本村絵図
  - 18) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.51～P.52
  - 19) 国土地理院ホームページ「地図記号と地形図図式」  
([https://www.gsi.go.jp/KIDS/KIDS05\\_00001.html](https://www.gsi.go.jp/KIDS/KIDS05_00001.html) 閲覧日：2020年12月6日)
  - 20) (財)日本地図センター企画編集部編集「明治前期手書彩色関東実測図資料編要約」
  - 21) 埼玉県神社庁『埼玉の神社 大里 北葛飾 比企』1992年 P.1066～P.1067
  - 22) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.287～P.288
  - 23) 東松山市ホームページ「準用河川新江川」  
(<http://www.city.higashimatsuyama.lg.jp/kurashi/machizukuri/kasen/1594016765463.html>  
閲覧日：2020年11月21日)
  - 24) 東松山市市史編さん課『東松山市の歴史 上巻』1985年 P.416～P.417
  - 25) 等覚院 十九世渡辺憲田「石碑の文」1977年
  - 26) 東松山市市史編さん課『東松山市史資料編第3巻』付図(1)  
「武州比企郡本郷松山町絵図 元文元年」東松山市 1983年
  - 27) 山本光正「海道・街道と交通路の名称」『通信総合博物館 研究紀要』  
第4号 2013年3月 P.2
  - 28) 岡田潔『東松山の地名と歴史』2010年 P.107～P.109
  - 29) 巖殿山正法寺公式ホームページ「正法寺とは：歴史」  
(<http://iwadonosan-shoboji.org/aboutus/> 閲覧日：2020年11月21日)
  - 30) 東松山市教育委員会『正法寺六面幢説明板』1983年
  - 31) 糸満翔子他「「沖縄地域」における地域資料の記録からの教材開発」  
(<http://kuzelabo.com/pdf/ken55.pdf> 閲覧日：2020年11月21日)
  - 32) 脇田武光「埼玉県東松山市における都心移動の空間認知に関する歴史地理学的研究」『歴史地理学紀要第27巻空間認知の歴史地理』1985年3月 P.241、P.239
  - 33) 箱岩英一『劔岳 点の記』をよりよく理解するための解説「日本の参謀本部とその役割」  
(<https://jsurvey.jp/tsurugidake/topics200807-1.pdf> 閲覧日2020年12月9日)
  - 34) weblio辞典「地図測量人名辞典：木村信卿」  
(<https://www.weblio.jp/content/%E6%9C%A8%E6%9D%91%E4%BF%A1%E5%8D%BF> 閲覧日 2020年12月9日)
  - 35) 上西勝也「史跡と標石で辿る日本の測量史」地図と測量の事件(アトラス伝説)  
(<http://uenishi.on.coocan.jp/j696shokiitsuwa.html> 閲覧日：2020年12月9日)
- その他 東松山市市史編さん課『石佛』1981年

## スタッフ

リーダー：山中	写真：加島
サブリーダー：網野	記録：池田
サブリーダー：星野	記録：小川
	会計：山崎(義)



一の巻 八反沼脇小径